出雲市の文化財報告 34

祇園原Ⅲ遺跡

県道斐川上島線（武部２工区）改良事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

2017 年 3 月

出雲市教育委員会

序

本書は，島根県出雲県土整備事務所から委託を受けて，平成27年度に実施した県道斐川上島線（武部２工区）改良事業予定地内に所在する祇園原（ぎおんばら）Ⅲ遺跡の発掘調査成果を記録した報告書です。

祇園原Ⅲ遺跡は，北に県内最大の広さを誇る出雲平野を望む出雲市斐川町南部の低丘陵にあります。今回の発掘調査で古代の土器や木炭生産の跡を確認しました。これは，人々が古代よりさまざまな営みをおこなってきたことを物語っています。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や，島根県出雲県土整備事務所をはじめ，関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

平成２９年（2017）３月

出雲市教育委員会

教育長　槇野　信幸

例　言

1　本書は平成 27 年度に出雲市教育委員会が実施した，県道斐川上島線（武部２工区）改良事業に伴う祇園原Ⅲ遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査は，下記の体制で実施した。

調査地及び調査面積　出雲市斐川町直江 3612 － 5・三絡 2136 － 4・2136 － 5　1,350㎡

調査体制（平成 27 年度・発掘調査）

事務局	花谷　浩（出雲市市民文化部　学芸調整官）	
	佐藤隆夫（　同　文化財課長）	
	穴道年弘（　同　課長補佐兼埋蔵文化財１係長）	
	景山真二（　同　埋蔵文化財２係長）	
調査員	石原　聡（　同　埋蔵文化財１係主任）	
調査補助員	糸賀伸文（　同　臨時職員）	
	永見　翼（　同　臨時職員）	
調査指導	深田　浩（島根県教育庁文化財課　主幹）	
発掘作業員	稲村玉枝・井上　栄・大輝正人・岡田光司・奥田利晃・勝部　誠・黒田元延	
	佐野静枝・昌子守男・周藤俊也・高根　豊・高根常代・多久野明雄・樋野光正	
	星野篤史・前島利輝・牟田口　洋・森脇昭夫・山口素直・渡部和憲	
室内整理作業員	田中麻理・前島浩子・吹野初子・吉村香織	

調査体制（平成 28 年度・報告書作成）

事務局	花谷　浩（出雲市市民文化部　学芸調整官）	
	佐藤隆夫（　同　文化財課長）	
	穴道年弘（　同　課長補佐兼埋蔵文化財１係長）	
	原　俊二（　同　埋蔵文化財２係長）	
調査員	石原　聡（　同　埋蔵文化財１係主任）	
調査補助員	永見　翼（　同　臨時職員）	
室内整理作業員	前島浩子・吹野初子・吉村香織	

3　協力者（敬称略）

大塚昌彦（株式会社測研文化財調査室長）・西尾克己（大田市教育委員会石見銀山課特任講師）

4　本書の編集は，花谷・穴道・原の指導のもと，石原が行った。

5　本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり，方位は座標北を示し，レベル高は海抜高を示す。

6　本書で掲載した写真の撮影は，石原が行った。

7　本報告書掲載の遺物及び実測図，写真は出雲市教育委員会が保管している。

目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　本調査の経過……2
第２章　遺跡の位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……6
第３章　範囲確認調査及び試掘調査……9
　第１節　範囲確認調査……9
　第２節　試掘調査……10
第４章　調査の成果……17
　第１節　本調査の概要……17
　第２節　尾根及び東側斜面の調査……22
　第３節　上段の調査……22
　第４節　中段の調査……24
　第５節　下段（山裾）の調査……25
第５章　自然科学分析（ＡＭＳ年代測定）……35
第６章　総　括……41
報告書抄録

挿図目次

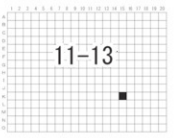
第１図　速報展の様子（出雲弥生の森博物館）……2
第２図　祇園原Ⅲ遺跡の位置……3
第３図　祇園原Ⅲ遺跡と周辺の主な遺跡……4
第４図　祇園原Ⅲ遺跡と周辺の地形……5
第５図　範囲確認トレンチ調査の位置……9
第６図　祇園原Ⅲ遺跡と本調査の範囲……10
第７図　トレンチ位置図……12
第８図　１トレンチ地滑り部分土層断面図……12
第９図　１トレンチ南壁土層断面図……13
第 10 図　２トレンチ南壁土層断面図……13
第 11 図　２トレンチ地滑りによる溝状部分土層断面図……13
第 12 図　３トレンチ南壁土層断面図　……14
第 13 図　６トレンチ南壁土層断面図……14
第 14 図　４トレンチ南壁土層断面図……15
第 15 図　９トレンチ西壁土層断面図……15
第 16 図　10 トレンチ南壁土層断面図……15
第 17 図　調査地周辺の地質図……16
第 18 図　地滑り地形と検出位置……16
第 19 図　５ライン（Ｈ～Ｋ）土層断面図……17
第 20 図　調査平面図①……18
第 21 図　調査平面図②……19
第 22 図　調査区尾根南北土層断面図……20
第 23 図　Ｉライン＋４ｍ（５～７）土層断面図-20
第 24 図　Ｆライン（８～９）土層断面図……21
第 25 図　10 ライン（Ｂ～Ｅ）土層断面図……21
第 26 図　尾根・上段出土遺物実測図……23
第 27 図　中段出土遺物実測図……24
第 28 図　上・中段出土石製品実測図……26
第 29 図　下段平面図……28
第 30 図　遺構平面図・断面図①……28
第 31 図　遺構平面図・断面図②……29
第 32 図　遺構平面図・断面図③……30
第 33 図　下段出土遺物実測図……31
第 34 図　下段出土銭貨拓影図……31
第 35 図　発掘調査の様子①……32
第 36 図　試料採取地点１……35
第 37 図　試料採取地点２……35
第 38 図　試料採取ポイント（２トレンチ）……36
第 39 図　試料採取ポイント（焼成土坑）……37
第 40 図　暦年較正図……38
第 41 図　暦年較正値の分布……39
第 42 図　発掘調査の様子②……40
第 43 図　出雲地方出土の鉄鉢形土器……42

図版目次

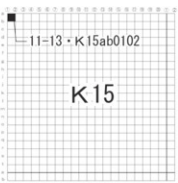
図版１　航空写真
（上：南西から　下：南東から）
図版２　発掘調査前（西から）
発掘調査前（東から）
図版３　全景（発掘調査後・西から）
図版４　尾根から西側斜面（南から）
尾根平坦部分（北から，背後に山設自動車道）
図版５　尾根平坦部分（南から，遠方に宍道湖を望む）
斜面部分（北から，背後に乱峠山）
図版６　尾根平坦部分（南から，遠方に出雲平野を望む）
図版７　１トレンチ南壁の土層（北から）
２トレンチ南壁の土層（北東から）
図版８　山裾部分の遺構（西から）
SL01 半截状況・完掘状況
SL02 半截状況・完掘状況
図版９　SL03 半截状況・完掘状況
SL04 検出状況・半截状況
SL05 半截状況・完掘状況
SL14 半截状況・完掘状況
図版10　上段出土土器
図版11　中段出土土器
図版12　下段出土土器
上・中段出土土器

表目次

第１表　遺構一覧表……２７
第２表　遺物観察表……３３
第３表　試料の詳細と年代測定結果……３６
第４図　鉄鉢形土器出土地一覧表……４３



中グリッド（１区画＝100m四方）



小グリッド（１区画＝５m四方）

グリッド図

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

県道 183 号斐川上島線は，島根県出雲市内を通る一般県道である。起点は，出雲市斐川町直江（国道９号，荒神谷入口交差点）であり，終点は，出雲市上島町（県道 26 号，出雲三刀屋線交差点）である。

平成 26 年度に島根県出雲県土整備事務所（以下，出雲県土）より県道改良工事予定地内の事前調査依頼を受け，出雲市文化財課（以下，文化財課）が周知の遺跡内の範囲確認調査を実施したところ，遺物を確認し，発掘調査を実施することとなった。

（事務手続き）

平成 26 年（2014）

４月 22 日　出雲県土が文化財課へ事前調査について依頼。

５月 16 日　祇園原Ⅲ遺跡が工事予定地内にあることを確認。

５月 26 日　文化財課より出雲県土へ祇園原Ⅲ遺跡について文化財保護法第 94 条第１項の手続きが必要と回答。

11 月 11 日から 11 月 14 までトレンチ調査，調査の結果，祇園原Ⅲ遺跡（Ｂ区Ｂ２トレンチ・第３章参照）のトレンチ１ヶ所において，須恵器の破片が多数出土し，付近に古墳時代後期～奈良時代の遺構がある可能性が高いことが判明（第１図）。

平成 27 年（2015）

２月 20 日　出雲県土が島根県教育委員会（以下県教委）へ文化財保護法第 94 条第１項の規定により通知。

４月１日　出雲県土と文化財課が契約し，発掘調査事業の開始。

６月 11 日　市教委から県教委へ文化財保護法９９条の手続きを行う。

７月２日　発掘調査開始（翌年１月 31 日まで）

平成 28 年（2016）

２月９日　市教委から県教委へ「斐川上島線（武部２工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取扱いについて（協議）」を提出。
市教委から県教委へ「埋蔵文化財保管証」を提出。
市教委から出雲警察署へ「埋蔵物発見届」を提出。
県教委から市教委へ「遺跡の取り扱いについて」の回答。
市教委から出雲県土へ「遺跡の取り扱いについて」の回答。

２月 22 日　県教委から市教委へ「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」の通知。

第２節　本調査の経過

県道斐川上島線の改築に伴う発掘調査により，1,350 ㎡の面積を発掘調査した。平成 27 年（2015）７月２日より発掘調査を開始した。調査区が丘陵の尾根から谷にかけての斜面が大部分であったため，雨天時には滑りやすく，調査は難航した。調査区の最も高所は標高 60 m付近の尾根であり，部分的に平坦面が確認できた。７月～８月はトレンチを 10 箇所設定した。９月からは尾根部を中心にトレンチを拡張して調査。11 月には斜面下裾部で焼成土坑（炭焼き跡・６基）ほかを確認。遺構の図化作業を進め，翌 28 年（2016）１月に県教委の調査指導，遺跡の取り扱い協議を行い，１月末に全体写真撮影，現地調査を終了した。約７ヶ月の調査期間だが，荒天時には作業を中断したため，実質の延べ日数は 76 日となった。

同年３月 27 日～４月 25 日まで出雲弥生の森博物館（出雲市大津町）にて速報展として，調査成果を公開した（第１図）。報告書作成は，平成 28 年度に実施した。

発掘調査日誌抄

平成２７年（2015）

７月２日　調査員１名，調査補助員２名，作業員２０名により調査を開始。尾根の東西方向に１トレンチを設定。また，前年度，範囲確認調査時のＢ区２トレンチも東西に再設定。

７月 22 日　尾根北側に３トレンチを設定。

７月 30 日　尾根南側に４トレンチを設定。

８月３日　　尾根から東側にかけて５トレンチを設定。

８月４日　　１トレンチで岩盤を検出。２トレンチでは溝状の遺構を確認。西側斜面下に６トレンチ，７トレンチを設定，掘り下げ。

８月 12 日　１トレンチの深掘り部分で地山層の断層部分を確認。地滑りが発生した痕跡と認識した。

８月 18 日　８・９・10 トレンチを設定して調査。

８月 24 日　トレンチ調査と並行して，遺物包含層確認箇所を中心にグリッドごとに拡張して調査。

８月 27 日　文化財調査コンサルタント渡邉正巳氏調査，１トレンチ地滑りの跡，２トレンチ溝状遺構についても地滑り（円弧滑り）の可能性を指摘。円弧滑りの痕跡が調査区西　側斜面で良くみられるとのこと。

９月 15 日　渡邉正巳氏調査（２回目）。１トレンチの地滑りは円弧滑りで滑落崖が良く見える。
２トレンチの溝状遺構も地滑り（円弧滑り）でできた空間に土砂が入り込んだことが判明。溝ではなかった。

９月 30 日　上段で須恵器の長頸壺（第 26 図－ 12）が出土，胴部内面に白色の固着物が残っている
ことが判明。尾根下の半円形の平坦部は，地滑り痕跡であった。

10 月５日　上段で須恵器の鉄鉢形土器（第 26 図－ 11）が出土　，（その後の整理作業で，中段，下段からも接合できる破片が出土，調査区西斜面に広がっていることが判明　。）

10 月 29 日　下段で円形プラン（遺構）を確認。

11 月５日　　炉 SL01・SL02 を精査，（サンプル持ち帰り　，鍛造剥片など鍛冶遺物確認調査，結果鍛冶遺物なし　。）

12 月 15 日　下段検出遺構を掘り下げ（炭焼き遺構確認）

12 月 22 日　課内検討会

平成２８年（2016）

１月 15 日　調査指導　島根県教育庁文化財課　深田浩氏

１月 31 日　全体写真撮影　調査終了

第１図　速報展の様子（出雲弥生の森博物館）

第２章　遺跡の位置と環境

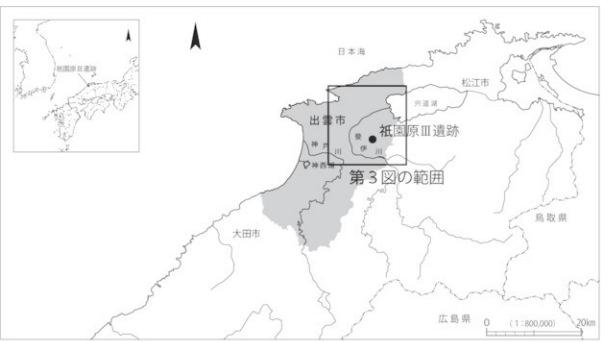
第１節　地理的環境

１．遺跡の位置と地理的環境

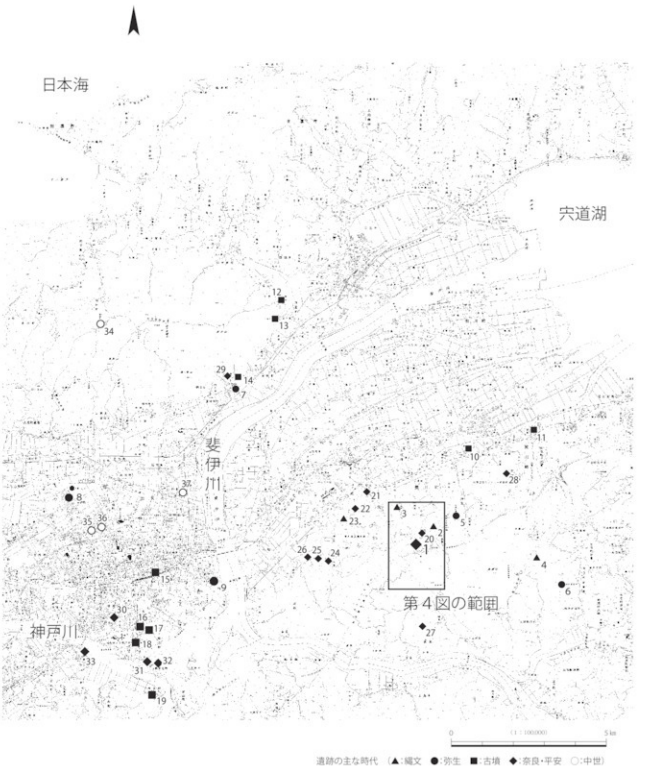
島根県出雲市は島根県の東部に位置し，人口 17 万５千人で，松江市，鳥取市に次ぐ山陰地方第３位の商工業都市である。遺跡の位置する旧斐川町は出雲市の東部に位置し，平成 23 年（2011）10 月に旧出雲市と合併した。北・西・南をヤマタノオロチ退治伝説で有名な一級河川斐伊川に囲まれ，東は美しい夕日で名高い宍道湖に面している。斐川地域は標高 366 ｍの仏経山を中心とする南部丘陵地帯と，斐伊川によって形成された肥沃な出雲平野に二分される。出雲平野は，島根県随一の穀倉地帯であり，冬の厳しい季節風から家屋を守る築地松の独特な景観を見ることができる。また，昭和 58（1983）年には，荒神谷遺跡で銅剣 358 本，銅鐸６個，銅矛 16 本が出土しており，その遺跡は全国でも知られる存在となっている。

南部の丘陵地帯は埋蔵文化財の密集地帯となっており，祇園原Ⅲ遺跡は，まさに南部丘陵に位置し，過去の山陰自動車道建設に先立つ事前調査で発見された遺跡である。発掘調査を実施した場所は，国史跡荒神谷遺跡から南西約 1.8km，古代山陰道の一部を確認した杉沢遺跡から南東へ 1.6km，出雲郡の郡家の正倉跡とみられる後谷遺跡から東へ３kmの場所に位置している。

遺跡は，標高 366m の仏経山（神名火山）から櫛の歯状に派生する低丘陵に所在し，その低丘陵（標高約 60m）の尾根及び斜面，斜面下の山裾部分までが遺跡の範囲となっている。



第２図　祇園原Ⅲ遺跡の位置



第３図　祇園原Ⅲ遺跡と周辺の主な遺跡

第４図　祇園原Ⅲ遺跡と周辺の地形

第２節　歴史的環境

本節では，祇園原Ⅲ遺跡が所在する斐川町を中心に出雲平野周辺地域の歴史的環境について概観する（遺跡の番号は第３図に対応）。

１．縄文時代

著しく海水面が上昇したいわゆる「縄文海進」期には，出雲平野にあたる部分に大きく海が入り込み，古宍道湖湾を形成していた。海進が鈍化すると，斐伊川と神戸川による河川堆積が進み，島根半島と陸続きになった。つまり東に古宍道湖，西に神門水海の成立を見ることになる（約5,000年前）。しかし斐伊川域では平野部の大部分はまだ水面下であった。その後沖積作用を受け陸地が拡がってくるものの，基本的にこの地勢は江戸初期まで変わらない。

早期の遺跡としては，赤変した集石遺構と，200点を超える石器（石鏃・スクレーパー・石槍など）を検出した新田畑Ⅰ遺跡（14）がある。早期終末の菱根遺跡や丘陵の奥深い谷にある結遺跡（５）でも早期末から前期初頭の刺突文土器・条痕文土器が出土した。中期に属する遺跡に上ケ谷遺跡（８）があり，ほぼ完形に近い深鉢が出土している。後谷遺跡（11）からは晩期の竪穴住居跡のほか，後期前葉の磨消縄文を施す土器・突帯文土器・打製石斧などが見つかった。さらには武部遺跡（３）からも後・晩期の縄文土器が出土している。

２．弥生時代

弥生時代には，前期に原山遺跡や平野部の拠点集落・矢野遺跡（24）が成立する。中期には，358本の銅剣，６個の銅鐸，16本の銅矛が発見され全国の青銅器分布図をぬりかえた荒神谷遺跡（４）や３９個の銅鐸が出土した加茂岩倉遺跡（13）のほか，銅戈などが出土した真名井遺跡がある。後期には青木遺跡など沖積地上にも集落や四隅突出型墳丘墓が造られた。後期後葉には，西谷墳墓群（29）に「王墓」とされる大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれた。

３．古墳時代

古墳時代に入ると出雲平野の集落は急激に衰退する。西谷の四隅突出型墳丘墓に続く前期古墳は築かれず，この時期に大きな変動がうかがわれる。前期後半には，大寺１号墳（20）と山地古墳，中期から後期前半に雲原古墳（17）や神庭岩船山古墳（16），など造られるがその数は少ない。後期後半になると古墳の数が激増する。北山山麓に上島古墳（19）や，未盗掘古墳である国常中村古墳（18）が築かれ，平野南部には今市大念寺古墳（28），上塩冶築山古墳（31），上塩冶地蔵山古墳（33）と大規模な古墳が続けて造られた。

４．古代（奈良・平安時代）

奈良時代前半に書かれた『出雲国風土記』（733年）によれば，斐川地域に当たる地には健部郷，

漆治郷，出雲郷，河内郷，神戸郷の名が見える。また，これらが属した出雲郡は，他に宇賀郷，美談郷，伊努郷，さらには杵築郷をも含む広大なものであった。祇園原Ⅲ遺跡の場所は，出雲国出雲郡健部郷に属す。斐伊川は「出雲大川」と呼ばれ，「流域が肥沃で五穀が豊かに実り，川魚も豊富である」と記されている。

この時代の官衙跡としては，出雲郡衙の一部に比定される斐川町出西の後谷遺跡がある。後谷遺跡では奈良時代から平安時代前期にかけての総柱建物跡がみつかり，大量炭化米や「□□倉」の墨書土器などが出土したことから郡家付設の正倉跡とみられている。郡庁もこの周辺に所在した可能性が高い。後谷遺跡に隣接した２遺跡のうち，稲城遺跡（10）からは，神門寺境内廃寺出土のものと類似する水切瓦が，小野遺跡（９）からは墨書土器，円面硯，鴟尾，軒丸瓦が出土している。これらの状況から両遺跡は郡家関連の可能性も高いとされる。

建物跡としては，武部西遺跡（２）では主軸を整然と南北に向けた掘立柱建物５棟が発見されている。また，杉沢Ⅲ遺跡（６）においては，２間四方の総柱建物跡が検出され，近くのピットから内側に赤色顔料が塗られた須恵器の高杯が，杯に蓋をした状態で出土した。付近の谷から「三井」と書かれた墨書土器も出土していることから，『出雲国風土記』に登場する御井神社の元宮の可能性も指摘されている。大倉Ⅳ遺跡（15）や小野遺跡からは，平安時代の掘立柱建物跡が発見されている。なかでも大倉Ⅳ遺跡からは，桁行７間，梁間６間の大型の建物跡が検出されており注目される。

杉沢遺跡（７）では丘陵尾根上に道路遺構が確認され，古代山陰道の一部と考えられる。

火葬墓の事例は，出雲市内で９例確認できる。出雲平野西南部に集中し，石櫛を伴うなど規模の大きいものがある。このうち，小坂古墳（36）では古墳石室内から石櫛・蕨手刀が出土した。奈良時代に追葬ないし改葬が行われたと考えられている。光明寺３号墓（35）は方形墳丘に火葬骨を入れた石櫃を納める特殊な例である。

このほか，仏経山の南東，標高 200 mの山頂に広がる天寺平廃寺（12）など，寺院関連の遺跡もある。

北山南麓の大寺薬師には，地方では珍しい平安前期の木造仏が残されている。その仏像が残される大寺薬師前面に大寺谷遺跡（22）が広がり，古代の軒丸瓦が出土している。鰐淵寺（23）所蔵の銅造観音菩薩立像の銘には「出雲国若倭部臣」とある。若倭部臣は『出雲国風土記』にみえる出雲郡郡司氏族で青木遺跡（21）出土木簡にもその名が見えるなど，この地域を代表する氏族であった。

５．中世

古代以来，出雲国の政治・経済の中心は国府にあった。しかし，鎌倉時代に出雲守護に補せられた佐々木義清の孫，頼泰は，13 世紀後半に塩冶郷を根拠とし塩冶氏と称した。この塩冶氏に関わるのが築山遺跡（32）で上塩冶築山古墳に隣接して礎石建物跡や区画溝などが見つかっている。塩冶氏が出雲平野に定着したころ，出雲大社の国造家は千家・北島に分かれた。出雲大社境内遺跡で発見された柱材三本を束ねて一本の巨大柱にする社殿は，これを少し遡る宝治２年（1248）の正殿式遷宮のものと推定されている。出雲平野の中世前半期の政治は，出雲大社と鰐淵寺，そして塩冶氏が動かしていっ

た。

守護職塩冶氏に対し，有力な国衙在庁官人だったのが朝山氏である。蔵小路西遺跡（26）はこの朝山氏の居館跡と目され，12-15 世紀にわたる大量の貿易陶磁器が出土した。貿易陶磁器は築山遺跡にも優品があるほか，越前焼大甕に龍泉窯系青磁が副葬された荻杼古墓（27）が著名である。この時期の遺跡には，他に 13 ～ 14 世紀の渡橋沖遺跡（25），14 ～ 15 世紀の矢野遺跡などがある。

中世には古代の杵築郷，伊努郷，河内郷の領域が神門郡に，宇賀郷と美談郷の領域が楯縫郡に組み込まれたと考えられる。残りの郡域は鎌倉期から戦国期にかけて出東郡に変わった。その後近世初頭に出雲郡となった。中世に入ると武家社会となり，斐川町内においても中世的様相が強くなってくる。土地は次第に開発され，荘園化されていくものも多かったと思われる。

6. 近世

斐伊川上流は流域に風化した花崗岩が広く分布し，中世から近世にかけて砂鉄採集と「たたら」と呼ばれる施設によって製鉄が盛んに行われた。たたら製鉄の原料採取方法である鉄穴流しの影響で多量の土砂が排出され，出雲平野の東部域は中世以降に急速に拡大し，陸地化していった。

近世に入ると，松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は，この改修により一本の大河川に統合され，出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川川岸には来原岩樋や出西岩樋が開削され，物資輸送や，農業用水の確保に利用された。このような松江藩の水利政策は，出雲平野を有数の穀倉地帯にした。

参考文献
池田敏雄　1999 『斐川の地名散歩』斐川町役場
出雲市教育委員会　2015 『出雲鰐淵寺 埋蔵文化財調査報告書』 出雲市の文化財報告 28
出雲市教育委員会　2016 『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』 出雲市の文化財報告 31
斐川町教育委員会　1972 『斐川町史』斐川町

第３章　範囲確認調査及び試掘調査

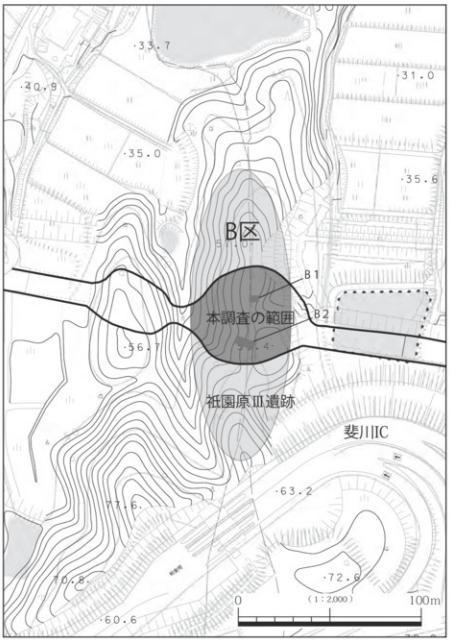
第１節　範囲確認調査

県道斐川上島線武部２工区予定路線内の範囲確認調査を平成 26 年（2015）11 月に実施した。丘陵ごとにＡ・Ｂ・Ｃの３区に分け，Ａ区１ヶ所，Ｂ区２ヶ所，Ｃ区５ヶ所の調査区を設定し，範囲確認調査を行った（第５図）。

調査の結果，Ａ区・Ｃ区からは遺物・遺構とも確認できなかった。Ｂ区は，周知の埋蔵文化財包蔵地で祇園原Ⅲ遺跡の場所にあたる。B1 からは遺構・遺物確認できなかったが，Ｂ２は，南北に延びる尾根の頂上部よりやや下がった西側斜面で，半円形状の平坦面が確認できる場所があり，須恵器や石器の細片が出土した。この場所は住居跡などの加工段を想定した。

この結果をうけ，祇園原Ⅲ遺跡範囲内のうち，県道の改良工事に該当するＢ区部分について平成 27 年度に本発掘調査を実施することとなった（第６図）。

第５図　範囲確認調査　トレンチの位置



第６図　祇園原Ⅲ遺跡と本調査の範囲

第２節　試掘調査

祇園原Ⅲ遺跡内のＢ区において調査範囲を確定するため，遺跡内の調査対象地 1350㎡のうち，地形に合わせて 10 ヶ所のトレンチを設定し、試掘調査を行った（第７図）。

１．トレンチ調査の概要

１トレンチ（第７・８・９図）

調査区中央部、幅２ｍ×長さ 37 ｍのトレンチを設定し、調査区尾根部分を含めた東西部分を確認した。遺物包含層はないが、尾根西側の表土から遺物が出土している。

中央部の地山をサブトレンチで深掘りした部分では、地滑りの痕跡を確認した（第８図）。

２トレンチ（第７・10・11図）

調査区南側、幅 1.5 m×長さ 22 m。範囲確認調査（平成 26 年度）のB区Ｂ２トレンチに相当する（第５・６図）。範囲確認調査時に遺物が出土し，本調査を行う発端になったトレンチである。このトレンチは尾根の西側，半円形の平坦部を通したトレンチで，住居跡などの存在を想定させる加工段状の平坦面であった。状況を確認するため，尾根部，西側斜面の拡張，掘削を進め，表土下に黄褐色の遺物包含層を確認した。

また、溝状にくぼむ部分も確認した。溝状部分は、地滑りにより亀裂が入った部分に土砂が流入した部分である（註１）。また、地滑りの時期を確認するために AMS の年代測定を実施した。結果では、ごく近年の地滑りとの結果が示されており（第５章　参照）、溝状の部分はごく近年に形成されたと考えられる。

３トレンチ（第７・12図）

調査区北側、幅２m×長さ 10 mのトレンチを設定し、尾根部分を確認した。表土以下地山で遺物・遺構とも確認できなかった。

４トレンチ（第７・14図）

調査区尾根の南側、幅 1.5 m×長さ４mのトレンチを設定し、尾根部分を確認した。表土以下地山で遺物・遺構とも確認できなかった。

５トレンチ（第７図）

調査区尾根の平坦部を含め東側に、幅 1.5 m×長さ 10 mのトレンチを設定し、尾根部分を調査した。遺物包含層は確認できなかったが表土より少量の遺物が出土した。

６トレンチ（第７・13図）

調査区南東側斜面裾部に幅２m×長さ６mのトレンチを設定した。表土下に黄褐色の遺物包含層が確認できる。遺構は確認できなかった。

７トレンチ（第７図）

調査区北東側斜面裾部に幅２m×長さ 14 mのトレンチを設定した。遺物包含層は確認できなかったが表土より少量の遺物が出土した。

８トレンチ（第７図）

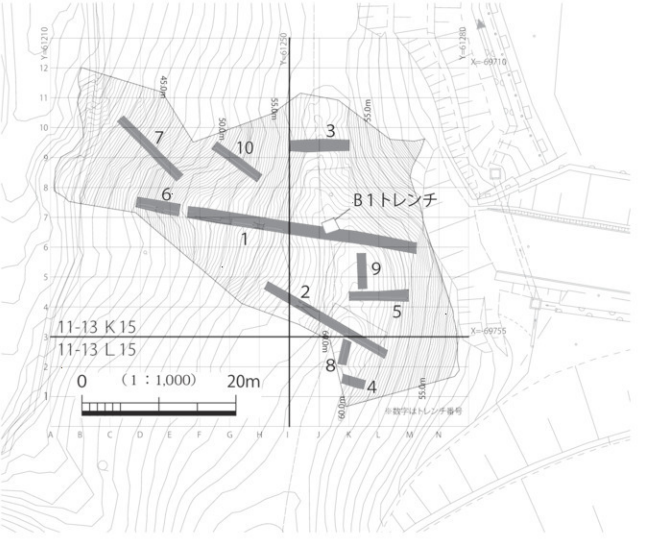
調査区尾根の平坦部、幅 1.5 m×長さ４mのトレンチを設定し、尾根部分を確認した。表土以下地山で遺物・遺構とも確認できなかった。

９トレンチ（第７・15図）

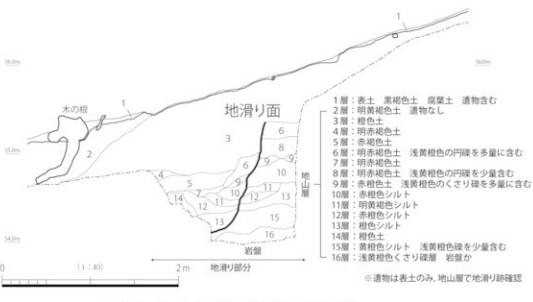
調査区尾根の平坦部、幅 1.5 m×長さ６mのトレンチを設定し、尾根部分を確認した。表土以下地山で遺物・遺構とも確認できなかった。

10 トレンチ（第７・16図）

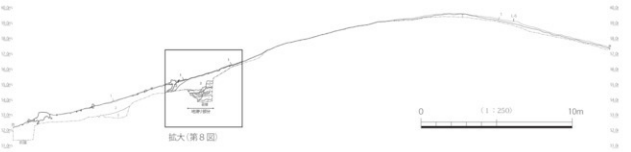
調査区中央北側斜面、幅 1.5 m×長さ９mのトレンチを設定した。表土下に黄褐色の遺物包含層が確認できる。遺構は確認できなかった。



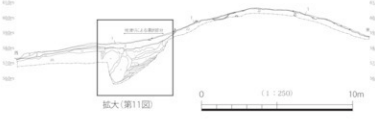
第７図　トレンチ位置図



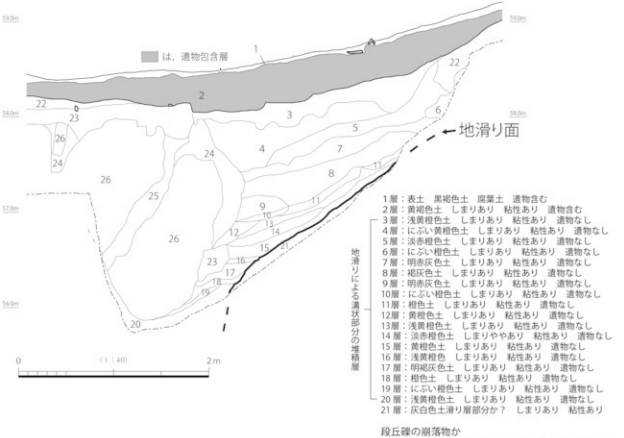
第８図　１トレンチ地滑り部分土層断面図



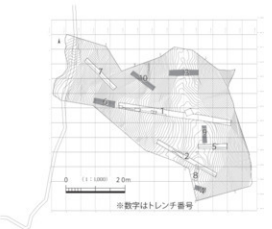
第９図　１トレンチ南壁土層断面図

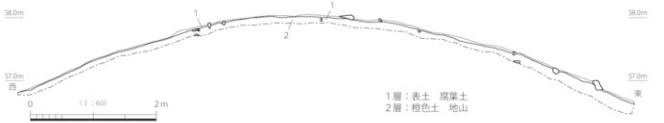


第 10 図　２トレンチ南壁土層断面図

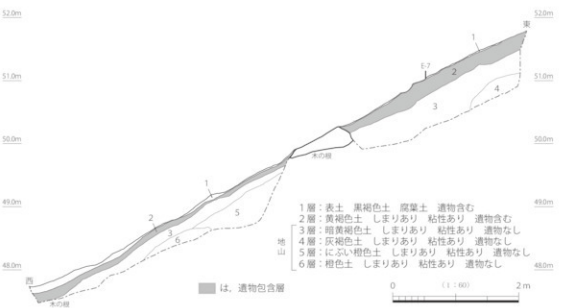


第 11 図　２トレンチ地滑りによる溝状部分土層断面図

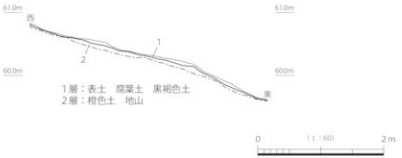




第 12 図　3 トレンチ南壁土層断面図

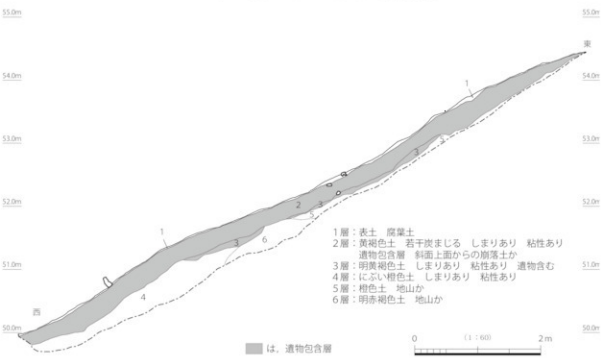


第 13 図　6 トレンチ南壁土層断面図



第 14 図　4 トレンチ南壁土層断面図

第 15 図　9 トレンチ西壁土層断面図

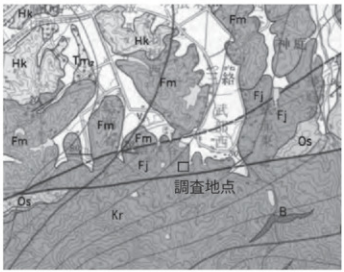


第 16 図　10 トレンチ南壁土層断面図

２．遺跡周辺の地質と地滑り跡について

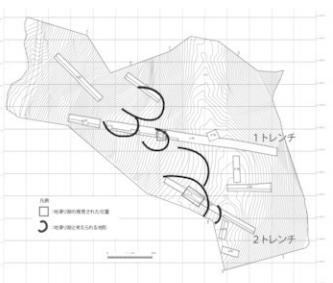
第 17 図に，調査地周辺の地質図（鹿野ほか 1991）を示す。この地質図によると，祇園原Ⅲ遺跡の立地する丘陵は，中期中新世に浅海で堆積した布志名層の砂岩から成る。試掘調査の結果，調査地の尾筋にはクサレ礫から成る礫層が認められ，地質図には記載されていない段丘礫層が分布しているものと考えられる。この段丘礫層は，調査地の標高 (50-60m) と周辺地域での分布状況から，山廻層の高位Ⅰ段丘層（大西 1979・鹿野ほか 1991）に対比される可能性がある。さらに，調査地の南北に断層が存在し，北には布志名層の泥岩，南には中期中新統である久利層の流紋岩溶岩が分布する。

また，第 18 図に示すように，調査地内には地滑り跡と考えられる馬蹄形の地形が幾つか認められる。これらの地滑り跡に対応するように，今回調査の１トレンチと２トレンチで滑り面が確認されている。



凡例
Te2：中位Ⅱ段丘堆積物泥，礫及び砂　Hk：鬼川層　Fm：布志名層シルト岩及び泥岩
Fj：布志名層砂岩　Kr：久利層流紋岩溶岩　Os：大森層砂岩（模岩を挟む）
鹿野ほか 1991 部分に加筆

第 17 図　調査地周辺の地質図



第 18 図　地滑り地形と検出位置

（文化財調査コンサルタント株式会社
渡辺正巳）

引用文献

大西郁夫 1979『出雲海岸平野の第四系』島根大学理学部紀要 13　131-144 頁

鹿野和彦・竹内圭史・松浦浩久　1991「5 万分の 1 地質図幅」『今市』地質調査所

第４章　調査の成果

第１節　本調査の概要

試掘調査の結果をもとに，遺物包含層の部分と，平坦面部分を中心に範囲を拡張して調査した（第20図・21図）。

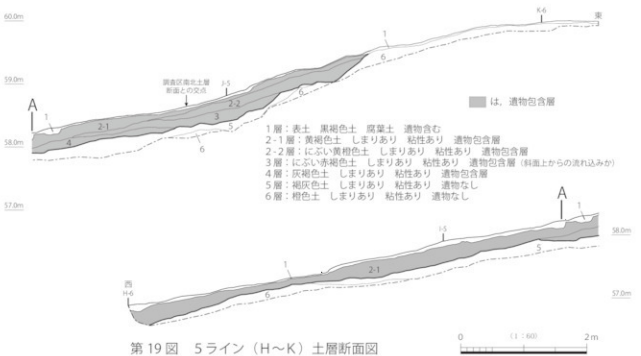
調査区西側標高 55 m付近の上段部分は尾根から一段下がったところで，円形の平坦部分がある。１トレンチ・２トレンチの調査結果で地滑りによる窪みである可能性が高いことがわかった[1]。

調査区西側標高 50 m付近の中段部分は，斜面の変換部分にあたり，地滑り先端部の隆起と急斜面が確認できる部分である。

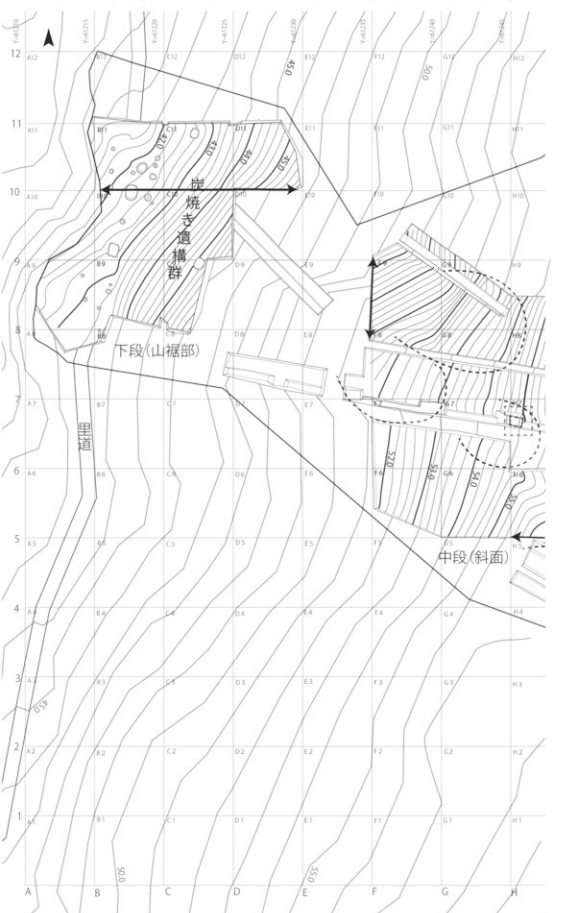
調査区西側標高 43 m付近下段部分（山裾部分）は，急斜面から谷部にかけての緩斜面部分である。この部分では，遺構が集中して確認できる。

尾根（調査区東側斜面含む）・上段（調査区西側）・中段（調査区西側）・下段（調査区西側）に分けて報告する。

なお，調査区は，５mの四方のグリッドを基本し，南北に数字１～ 13，東西は，Ａ～Ｎの文字を用いて設定した。グリッドラインは，国土座標軸に合わせている。グリッド名は，北西角の杭Ｎｏ．を用いる。

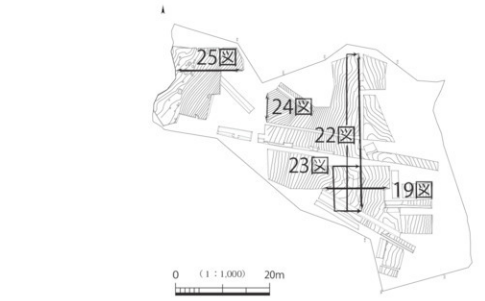


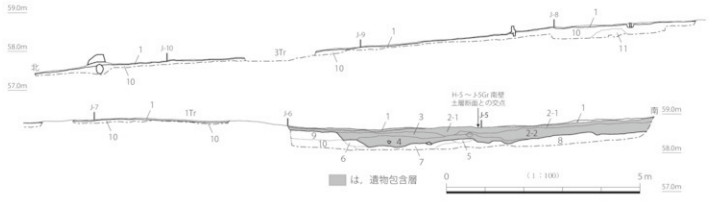
第 19 図　５ライン（Ｈ～Ｋ）土層断面図



第 20 図　調査平面図①

第 21 図　調査平面図②

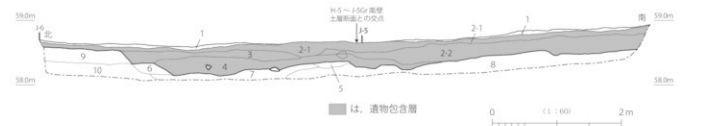




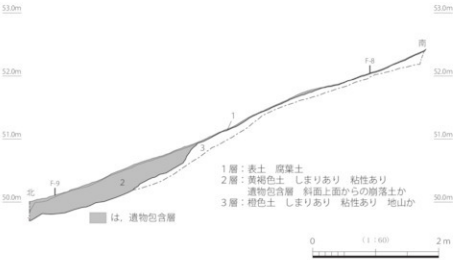
第 22 図　調査区尾根南北土層断面図

遺物包含層
- 1層：表土　黒褐色土　腐葉土　遺物含む
- 2-1層：にぶい黄橙色土　しまりあり　粘性あり　遺物含む
- 2-2層：黄褐色土　しまりあり　粘性あり　遺物包含層
- 3層：にぶい赤褐色土　しまりあり　粘性あり　遺物包含層
- 4層：灰褐色土　しまりあり　粘性あり　遺物包含層

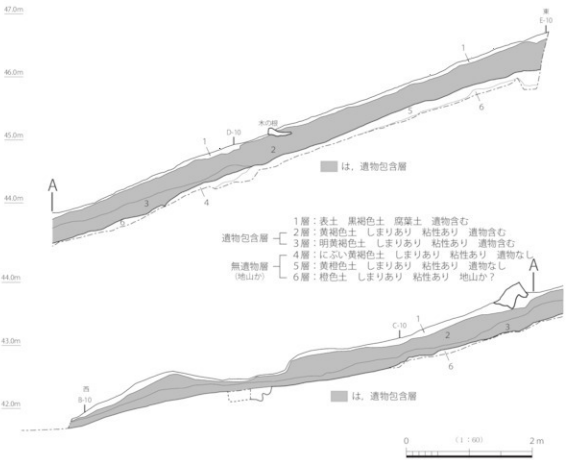
地山土（無遺物層）
- 5層：暗褐色土　しまりあり　粘性あり　遺物なし
- 6層：にぶい橙色土　しまりあり　粘性あり　遺物なし
- 7層：灰褐色土　しまりあり　粘性あり　遺物なし
- 8層：明褐色土　しまりあり　粘性あり　遺物なし
- 9層：にぶい橙色土　しまりあり　粘性あり　遺物なし
- 10層：橙色土　しまりあり　粘性あり　10 cm程度の亜円礫含む　地山土か
- 11層：黄褐色土　しまりあり　粘性あり　10 cm程度の亜円礫含む　地山土か



第 23 図　Ｉライン＋4m（5～7）土層断面図



第 24 図　Fライン（8～9）土層断面図



第 25 図　10 ライン（B～E）土層断面図

第２節　尾根及び東側斜面の調査

緩斜面の部分もあることから，住居跡等が存在する可能性を考えて，尾根全域と東側斜面の１トレンチと２トレンチの間の部分を拡張して調査したが，表土を除去すると，明黄褐色の地山面が確認でき，遺構は存在しないことが分かった。遺物の出土もごく少量で，Ｋ４グリッドで須恵器破片３点，土師器破片１点。Ｋ６グリッドで須恵器破片１点の出土である（第20図・第21図・第22図）。

５トレンチでは，遺物の数が少ないが，須恵器の坏口縁部が表土層より出土している（第26図８）。尾根上から出土した数少ない遺物である。

斜面及び尾根にも遺構があった可能性は，西側斜面の出土遺物からも推測できるが，明瞭な遺構は検出していない。土は地滑りによって谷に向かって流出しているようである。

第３節　上段の調査

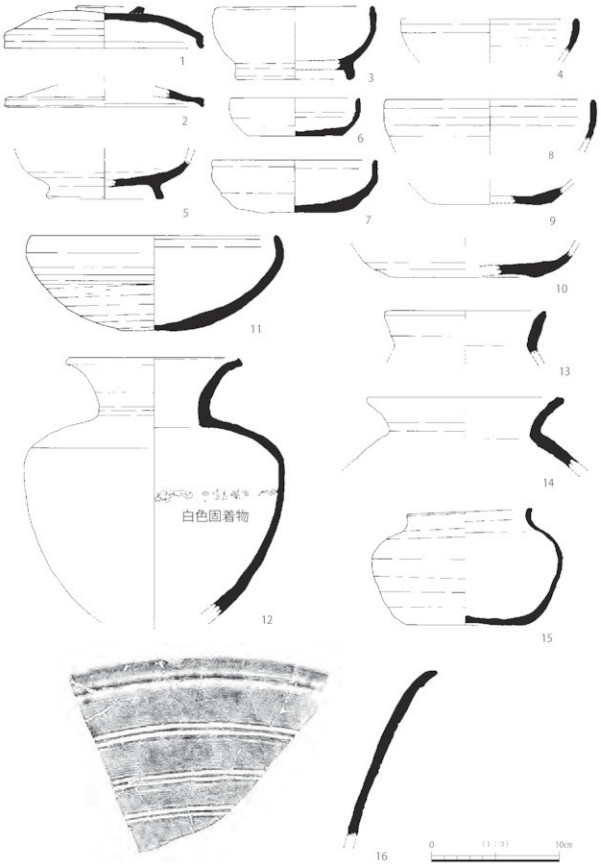
調査区西側の上段部分は，半径約５ｍの半円形の平坦部分が所在する部分である。試掘調査においても遺構（加工段や住居跡）の可能性を考えトレンチ調査をした部分である（第19図・第20図・第21図）。鉄鉢形須恵器が出土しており，地滑りの影響であろうか，破片が上・中・下段に広く広がっている。

上段で図化できた遺物は，以下のとおりである（第26図）。

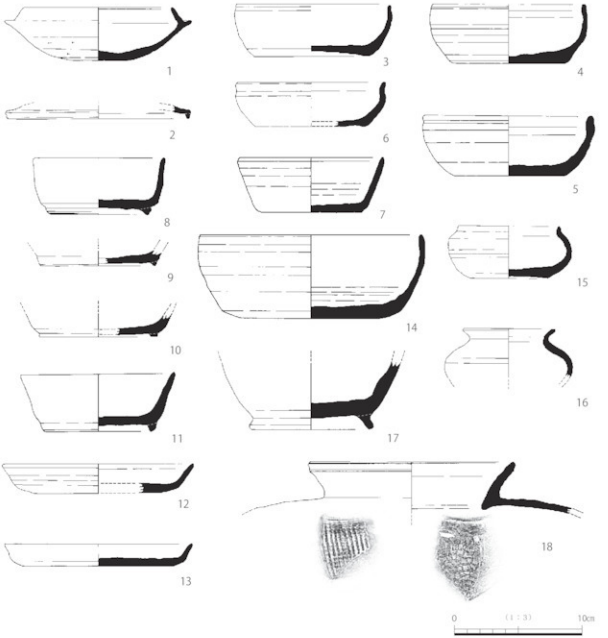
出土遺物（第26図・図版11）

上段から出土した遺物は，須恵器12点，石器（半製品含む）６点である。なお，出土須恵器の分類について古墳時代は，大谷晃二氏の編年（出雲○期アラビア数字と表示），古代の坏・皿については，島根県古代文化センターの出雲編年（出雲○期ローマ字数字と表示）を用い，皿・壺類については出雲国庁編年を併用する[2]。

１は坏蓋で外面ヘラ切りの後ナデ。つまみは，貼り付けの輪状つまみである。出雲編年の蓋Ⅱ類Ｃ２型式で，出雲Ⅲ期（７世紀後半～８世紀前半）である。２は坏蓋である。つまみをもち，口縁部内側に身受けのかえりを持たない（蓋Ⅱ類），口縁端部は，外側から面取りをしている（Ｄ２ａ型式），出雲ⅣＡ期（８世紀前半）と考えられる。３・４は，坏で，外面底部回転糸切りの後高台貼り付けのＡ４ｂ型式で出雲Ⅲ～ⅣＡ期である。５・６・９は，坏底部。７は２トレンチ出土の坏で，外面底部回転糸切りの後一部なでている。高台をもたない（坏Ⅰ類）で，Ａ３型式，Ⅲ～ⅣＣ期である。10は２トレンチ出土の坏である。外底面回転糸切り，高台をもたない坏Ⅰ類である。11は鉄鉢形須恵器で外面底部へラケズリ，内面底部指オサエ，底面丸底である。12は，長頸壺で胴部外面たたき，内面指オサエである。胴部内面，口縁下10.2ｃｍに上下幅0.8ｃｍの帯状に残る白色の固着物がある。内容物の液体が蒸発した後に固着したものと考えられる。内容物は不明である。13は，短頸壺の口縁部である。14は，壺類の口縁部である。15は２トレンチ出土の短頸壺で，口縁部は外反し，外面底部糸切りの後一部なでている。16は，甕の口縁部で，凹線で４段に区画し，その３段に櫛描波状文をめぐらす。



第 26 図　尾根・上段出土遺物実測図



第 27 図　中段出土遺物実測図

第４節　中段の調査

中段部分について遺構は確認できないが，遺物が出土したため，１トレンチ及び 10 トレンチのそれぞれ南側について拡張して調査した（第 20 図・第 21 図）。

出土遺物（第 27・28 図・図版 12）

中段から出土した遺物は，須恵器が 11 点，石器が３点である。須恵器は次の遺物である（第 27 図）。

１は坏身である。出雲４期（７世紀初め）。２が 10 トレンチ出土の坏蓋。蓋Ⅱ類Ｃ２型式で，出雲Ⅲ期である。３，４，５は，坏で，外面底部回転糸切りの後なでている。坏Ⅰ類，A3 型式で出雲Ⅲ～Ⅳ C 期である。６は 10 トレンチ出土の坏で底面静止糸切り。口縁部は，明瞭に外側に折れる。坏Ⅰ類Ａ２型式で，出雲Ⅲ期以降である。７は，坏Ⅰ類　体部が外傾するＢ１型式で出雲ⅣＡ期である。８は高台付の坏である坏Ⅱ類，Ｂ２型式出雲ⅣＡ～ⅣＣ期である。９は１トレンチ出土の坏である。外面底部回転糸切りの後高台を貼り付けている。出雲編年では，高台をもち（坏Ⅱ類），底部から体部が直線的に立ち上がる（Ｂ類），出雲編年Ｂ３型式で，出雲ⅣＡ～ⅣＣ期（８世紀前半～９世紀前半）である。10 は，６トレンチ出土の坏で底部回転糸切りの後高台を貼り付けている。高台をもつ坏Ⅱ類である。11 も高台付の坏である坏Ⅱ類，Ｂ３型式出雲ⅣＢ～ⅤＢ期である。12 は 10 トレンチ出土の皿で，底面回転糸切り，皿Ⅰ類である。13 は皿である。外底面回転糸切り，高台をもたない皿Ⅰ類，Ｃ２型式で出雲ⅣＡ～ⅤＡ期である。14 は，坏である。坏Ⅰ類Ａ６型式で出雲Ⅲ～ⅣＣ期である。15 は，短頸壺で出雲国府第５型式（８世紀末葉から９世紀前葉）である。16 は，小壺である。17 は１トレンチ出土の長頸壺の底部。Ａ３型式で，出雲Ⅲ期である。18 は６トレンチ出土の横瓶の口縁部。外面・内面にたたき目が確認できる。

上・中段出土の石製品は次の通りである（第 28 図）。石鏃は，４点出土している。１は無茎石鏃。石材は砂岩系の硬質岩か。えぐりが深く縄文期の可能性がある。２は無茎石鏃であるが，脚部が大きく欠損している。石材は黒曜石。３は無茎石鏃である。石材は黒曜石。えぐりは浅い。弥生時代の石鏃の可能性がある。４も無茎石鏃である。石材はサヌカイトか。えぐりは浅い。弥生時代の石鏃の可能性がある。５・６・７は石器の剥片であろうか。石材は黒曜石である。８は石器，スクレイパーであろうか。石材は安山岩系である。９は石斧か。石材は安山岩系。

第５節　下段（山裾）の調査

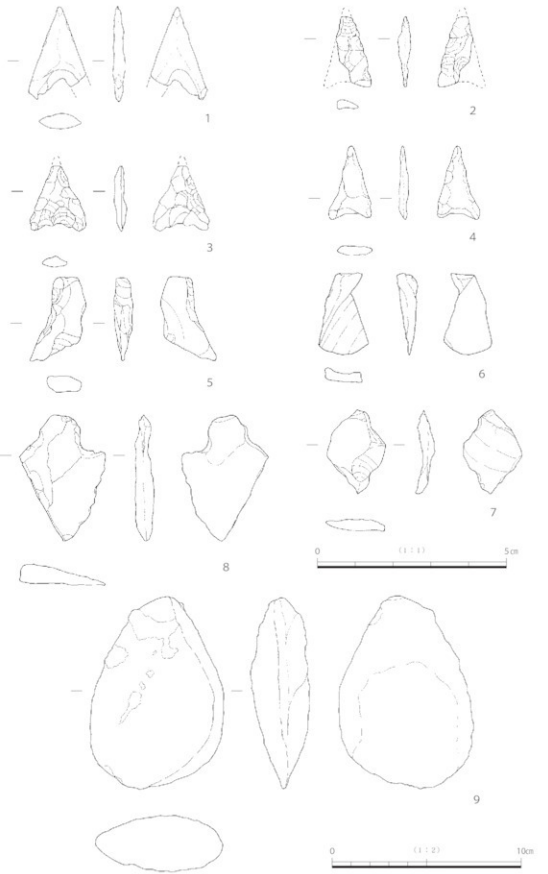
検出した遺構は，西側斜面の山裾部分に集中している（第 29 図）。調査区西側の斜面裾，Ａ９，Ｂ９・10・11，Ｃ９・11，グリッドで遺構を検出した。なかでも，焼成土坑やその周囲には，小規模なピットが検出されている。柱の痕跡は不明瞭であるが，簡易的な覆い屋があったのであろうか。被熱した焼成土坑６基について記す。

焼成土坑ＳＫ 01（第 31 図・第１表・図版８）

焼成土坑は，標高は 42.0 m。長軸 81㎝，短軸 71㎝，深さ 17㎝，楕円形で断面皿状の遺構である。遺物は出土していないが，底面に炭化物の堆積が確認できる。側面は，被熱により赤褐色となっている。AMS 年代測定では，11 ～ 12 世紀の年代が示されている。炭焼き跡の可能性が高い。

焼成土坑ＳＫ 02（第 31 図・第１表・図版８）

標高は 42.2 m。規模は，長軸 112㎝，短軸 85㎝，深さ 22㎝，隅丸長方形で断面逆台形の遺構である。底面に炭化物の堆積が確認できる。壁面は，被熱により赤褐色となっている。遺物は出土していないが，AMS 年代測定で７～８世紀の年代が示されている。炭焼き跡の可能性が高い。



第 28 図　上・中段出土石製品実測図

焼成土坑ＳＫ 03（第 32 図・第１表・図版９）

標高は 42.8 ｍ。規模は，長軸 91cm，短軸 74cm，深さ 18cm，隅丸長方形で断面逆台形の遺構である。底面に薄い炭化物の堆積が確認できる。壁面は，被熱により赤褐色となっている。遺物は出土していないが，床が平坦で壁がほぼ垂直に立ち上がる点などＳＫ02 と類似する点が多い。炭焼き跡の可能性が高い。

焼成土坑ＳＫ 04（第 32 図・第１表・図版９）

標高は 43.1 ｍ。規模は，長軸 42cm，短軸 31cm，深さ４cm，楕円形で断面浅い皿状の遺構である。厚さ４cmの炭化物の堆積が確認できる。遺物は出土していないが，AMS 年代測定で 12 ～ 13 世紀の年代が示されている。側面の被熱は確認できないが，炭焼き跡の可能性が高い。

焼成土坑ＳＫ 05（第 30 図・第１表・図版９）

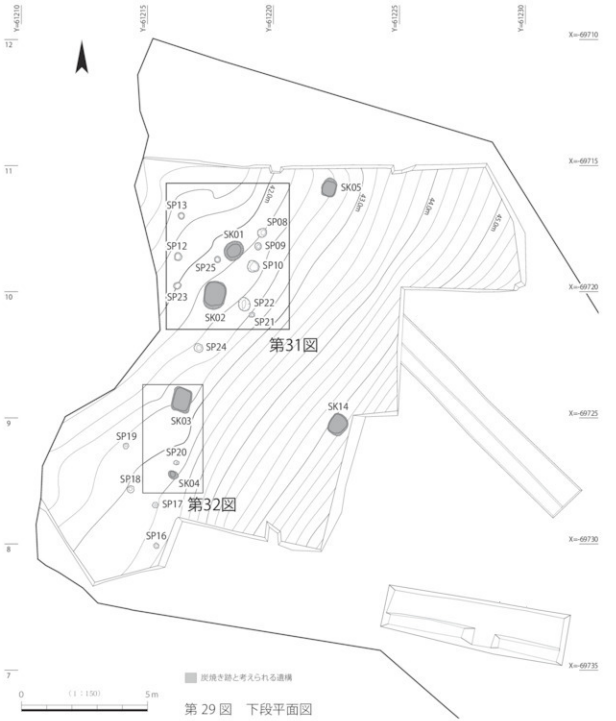
標高は 42.6 ｍ。規模は，長軸 75cm，短軸 58cm，深さ 11cm，隅丸長方形で断面逆台形の遺構である。遺物は出土していない。底面に炭化物の堆積が確認でき，炭焼き跡の可能性が高い。

焼成土坑ＳＫ 14（第 30 図・第１表・図版９）

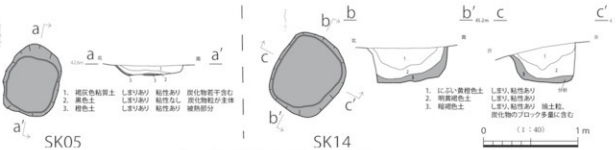
標高は 45.0 ｍと他の遺構より一段高いところにある。規模は，長軸 84cm，短軸 73cm，深さ 40cm，

第１表　遺構一覧表

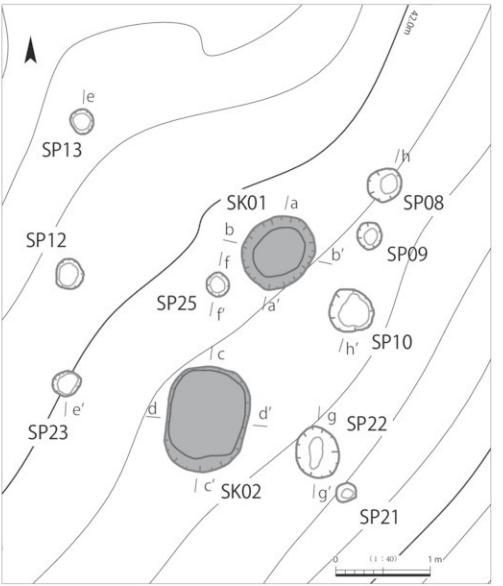
遺構名	グリッド番号	規模（cm）			平面	断面	時期	備考
		長軸	短軸	深さ				
ＳＫ01	Ｂ11	80	71	17	楕円形	皿状	平安（11~12Ｃ）	AMS年代測定・側面被熱・炭焼き跡
ＳＫ02	Ｂ10	112	85	22	隅丸長方形	逆台形	奈良（８Ｃ）	AMS年代測定・側面被熱・炭焼き跡
ＳＫ03	Ｂ10	91	74	18	隅丸長方形	逆台形	不明	側面被熱・炭焼き跡
ＳＫ04	Ｂ９	42	31	４	楕円形	皿状	平安（12~13ｃ）	AMS年代測定・炭化物多量出土・炭焼き跡
ＳＫ05	Ｃ11	75	58	11	楕円形	逆台形	不明	炭化物あり・炭焼き跡
ＳＰ08	Ｂ11	37	36	13	楕円形	漏斗状	不明	
ＳＰ09	Ｂ11	29	26	10	楕円形	皿状	不明	
ＳＰ10	Ｂ11	45	45	16	楕円形	漏斗状	不明	
ＳＰ12	Ｂ11	33	29	21	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ13	Ｂ11	27	25	19	楕円形	逆台形	不明	
ＳＫ14	Ｃ９	84	73	40	隅丸長方形	逆台形	奈良（８Ｃ）	AMS年代測定・側面被熱・炭焼き跡
ＳＰ16	Ｂ８	25	25	15	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ17	Ｂ９	20	20	９	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ18	Ａ９	30	30	10	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ19	Ａ９	25	25	36	楕円形	漏斗状	不明	
ＳＰ20	Ｂ９	15	15	９	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ21	Ｂ10	20	20	７	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ22	Ｂ10	55	45	52	楕円形	漏斗状	不明	
ＳＰ23	Ｂ11	31	28	11	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ24	Ｂ10	35	35	12	楕円形	逆台形	不明	
ＳＰ25	Ｂ11	26	26	９	楕円形	逆台形	不明	



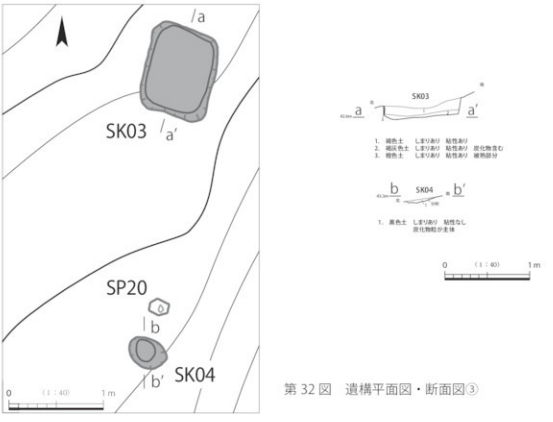
第 29 図　下段平面図



第 30 図　遺構平面図・断面図①



第 31 図　遺構平面図・断面図②



第 32 図　遺構平面図・断面図③

隅丸長方形で断面逆台形の遺構である。底面に炭化物の堆積が確認できるほか，壁面は被熱により赤褐色となっている。床が平坦で壁がほぼ垂直に立ち上がる。

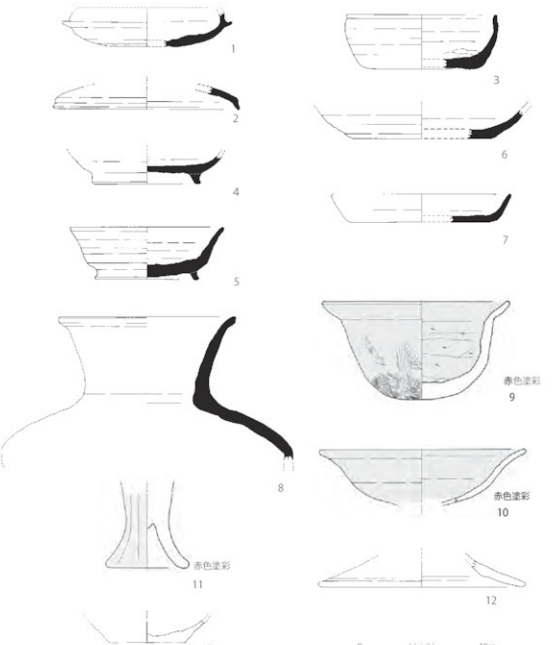
SK14 は，SK02，SK03 とも形状的に共通の点がある。遺物は出土していないが，AMS 年代測定で７～８世紀の年代が示されている。炭焼き跡の可能性が高い。

出土遺物（第 33・34 図・図版 14）

下段の出土遺物は，須恵器８点，土師器５点，銭貨３点である。須恵器は次の通りである。１は，坏身である。出雲４期。２は，坏蓋である。口縁部内側に身受けのかえりをもたない蓋Ⅱ類，C2 型式で，出雲Ⅲ期である。３は坏である。坏Ⅰ類の A3 型式で出雲Ⅲ～Ⅳ C 期である。４は高台をもつ皿Ⅱ類，A２型式で出雲Ⅲ～Ⅳ A 期である。５は坏である。調査区南側の里道で表採した遺物である。外底面ヘラケズリの後高台貼り付け、内外面回転ナデ。坏Ⅱ B 類Ｂ３形式で出雲Ⅳ B 期～Ⅳ C 期である。６は坏であろうか。７は高台をもたない皿Ⅰ類Ｃ２型式で出雲Ⅳ A ～Ⅴ A 期。８は長頸壺である。頸部が太く短くなった出雲国府第５型式のものであろう。

土師器としては，出土破片数は多いが，図化できた遺物は次の５点である。９は，小型の壺である。外面ハケ調整，内面口縁部以下粗いヘラ削りで，外面，内面とも赤色塗彩されている。中野清水遺跡Ⅱ区２層の出土例がある[3]。７世紀後半から８世紀前半と考えられる。10 は高坏の皿部。内・外面に赤色塗彩あり。11 は，高坏の脚である。12 は，高坏の脚部。13 は弥生土器。甕の底部か。

銭貨としては，寛永通宝が３点出土している。西緩斜面裾部には現代も使用されている南北の幅 1.5 m程度の里道があり，その道沿いの表土から採集した。寛文８年（1668）から天和３年（1683）までの 16 年間に江戸亀戸村（現東京都江東区）で製造された新寛永（文銭）である[4]。



第 33 図　下段出土遺物実測図

第 34 図　下段出土銭貨拓影図

註

（１）　文化財調査コンサルタント渡辺正巳氏にご指導いただいた。

（２）　須恵器の分類は，下記の文献資料を参考にした。

大谷晃二 199４「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会

岡田裕之・土器検討グループ 201０「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究ー古代山陰地域の土器の様相と領域性ー』島根県古代文化センター

島根県教育庁埋蔵文化財センター 201３『史跡出雲国府跡』ー９総括編ー風土記の丘地内遺跡発掘調査 22　島根県教育委員会

（３）　島根県教育委員会　200４『大津町北遺跡　中野清水遺跡』の第 59 図 252 参照。

（４）　永井久美男　199６『日本出土銭総覧』199６年版　兵庫埋蔵銭調査会

第 35 図　　発掘調査の様子①

第２表　遺物観察表

【上段】

挿図	番号	種別	器種	出土位置	位置分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
26	1	須恵器	坏蓋	I6・J6	上	15.4		3.3	内・外　回転ナデ	密	良好	灰オリーブ	輪状つまみ 出雲国庁　第5型式
26	2	須恵器	坏蓋	2トレ	上				内・外　回転ナデ	密	良好	灰白色	出雲IV A期
26	3	須恵器	坏	H5・I5	上	13.3			内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	
26	4	須恵器	坏	I6・J5	上	12.2	8.6	5.7	内・外　回転ナデ	密	良好	灰白色	出雲国庁　第2型式
26	5	須恵器	坏	J5・D11	上・下		8.4		内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲III～IV A期
26	6	須恵器	坏	H6・I5	上		8.6		内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	
26	7	須恵器	坏	2トレ	上	12.8	8.8	4.1	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲III～IV C期
26	8	須恵器	坏	5トレ	尾根	15.9			内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	
26	9	須恵器	坏	I5	上		9.5		内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	
26	10	須恵器	皿	2トレ	上		10.5		内・外　回転ナデ	密	良好	灰白色	出雲IV A～V A期
26	11	須恵器	鉢鉢形	D11・G6・H6・I8・G7	上・中・下	18	5	7.3	内・外　回転ナデ 底面　ヘラケズリ	密	良好	灰色	底面丸底
26	12	須恵器	長頸壺	H6・I6	上	13.6			内・外　ヨコナデ 外タタキ内オサエ	密	良好	灰色	出雲国庁　第5型式・内面
26	13	須恵器	短頸壺	I6・J6	上	12.6			内・外　ヨコナデ	密	良好	灰色～オリーブ黒	口縁部
26	14	須恵器	壺類	I6	上	14.5			内・外　ヨコナデ 体部内外タタキ	密	良好	にぶい褐色	口縁部
26	15	須恵器	短頸壺	2トレ	上・中	9.3	9	9.1	内・外　回転ナデ	密	良好	黒褐色	
26	16	須恵器	甕		上					密	良好		口縁部

【中段】

挿図	番号	種別	器種	出土位置	位置分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
27	1	須恵器	坏身	F6・F7・G6・H6	中	11.5	5.6	4	内・外　ナデ 外底面ヘラケズリ	密	良好	灰色	出雲4期か
27	2	須恵器	坏蓋	10トレ	中	14			内・外　回転ナデ	密	良好	灰白色	出雲III期
27	3	須恵器	坏	G6・F6・H6	中	12.1	8.8	4.1	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲III～IV C期
27	4	須恵器	坏	G6・F6	中	12	8.9	4.65	内・外　回転ナデ	密	良好	褐灰色	出雲III～IV C期
27	5	須恵器	坏	F6・F7・G6	中	10	7.6	4.4	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲IV A～IV C期
27	6	須恵器	坏	10トレ	中	11.3	8.4	3.4	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲III期以降
27	7	須恵器	坏	F7・G6	中	11.2	8	4.3	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲IV A期
27	8	須恵器	坏	F6・F7・G8・G7	中	13	8.4	4.7	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲III～IV C期
27	9	須恵器	坏	1トレ	中		8.9		内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲IV A～IV C期
27	10	須恵器	坏	6トレ	中・下		9.1		内・外　回転ナデ	密	良好	灰白色	出雲IV C期
27	11	須恵器	皿	10トレ	中	12.8	8	2.4	内・外　回転ナデ	密	良好	オリーブ灰色	出雲IV A～V A期
27	12	須恵器	皿	F6・F7・G7	中	12.2	8.8	4.1	内・外　回転ナデ	密	良好	灰色	出雲IV B～V B期
27	13	須恵器	坏	B9・B10・C10・F6	中・下	17.1	11.2	6.4	内・外　回転ナデ 底部・ヘラケズリ	密	良好	灰色	出雲III～IV C期
27	14	須恵器	皿	F6・F7	中		11.8		内・外　ヨコナデ 外タタキ内オサエ	密	良好	灰色	出雲IV A～V A期
27	15	須恵器	短頸壺	F6・G6	中	7.95	6.0	4.1	内・外　ヨコナデ	密	良好	灰白色	出雲国府第5型式か
29	16	須恵器	小壺か	G6	中	8		2.7	内・外　ヨコナデ 体部内外タタキ	密	良好	灰色	
27	17	須恵器	長頸壺か	1トレ	中		9.2		内・外　ナデ	密	良好	黒褐色	出雲III期
27	18	須恵器	横瓶か	6トレ	中・下	15.6			内・外　タタキ	密	良好	灰色	

【石器】

挿図	番号	種別	器種	出土位置	位置分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	備考
29	1	石器	石鏃	H5	上	2.4	1.6	0.3	不明(砂岩系か)	脚端部欠損・無茎石鏃・えぐり深い(縄文か)
29	2	石器	石鏃	H7	上	1.9	0.7	0.25	黒曜石	先端部、体部～脚部欠損・無茎石鏃か。
29	3	石器	石鏃	F8	中	1.7	1.5	0.3	黒曜石	先端部欠損・無茎石鏃・えぐり浅い(弥生か)
29	4	石器	石鏃	F8	中	1.9	1.1	0.2	サヌカイト？	無茎石鏃・えぐり浅い(弥生か)
29	5	剥片		2トレ	上	2.2	1.1	0.4	黒曜石	石器未製品か
29	6	剥片		H6	上	2.2	1.4	0.5	黒曜石	石器未製品か
29	7	剥片		H7	上	2.2	1.1	0.3	黒曜石	石器未製品か
29	8	石器		I5	上	6.6	4.6	1	安山岩質	石鏃未製品か。
29	9	石器		F10	中	10.3	7	3	安山岩質か	石斧か。

【下段】

挿図	番号	種別	器種	出土位置	位置分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
33	1	須恵器	坏蓋	D11	下	14.6			内・外 回転ナデ	密	良好	灰色	出雲II期
33	2	須恵器	坏身	B9+B10	下	10.8			内・外 回転ナデ 外底部:ヘラケズリ	密	良好	灰色	出雲4期か
33	3	須恵器	坏	B9	下	12	9	4.5	内・外 回転ナデ	密	良好	灰色	出雲II～IV C期
33	4	須恵器	坏	F7+G6	下		11.3		内・外 回転ナデ	密	良好	灰白色	
33	5	須恵器	皿	B9	下			8.4	内・外 回転ナデ	密	良好	にぶい赤褐色	出雲II～IV A期
33	6	須恵器	坏	表採		12	8.2	4.2	内・外 回転ナデ	密	良好	灰色	出雲IV II期～IV C期
33	7	須恵器	皿	B9	下	14.4	11.4	2.3	内・外 回転ナデ	密	良好	灰色	出雲IV A～V A期
33	8	須恵器	長頸壺	C11	下	14.4			内・外 ナデ	密	良好	灰色～黒	出雲II～IV C期
33	9	土師器	短頸壺	B11	下	14.1	2.8	7.8	内面口縁部以下粗いヘラケズリ 外面:ハケ調整 内外面赤色塗彩	粗	良好	暗褐色	7世紀後半～8世紀前半。内外面赤色塗彩、脚部高か。
33	10	土師器	高坏	B11	下	15.5			内・外 ヨコナデ 外面:赤色塗彩	密	良好	にぶい赤褐色	口縁部～体部のみ
33	11	土師器	高坏	D11	下		6か		外面 ヘラケズリ 赤色塗彩	粗	良好	橙	高坏の脚部
33	12	土師器	高坏	B11	下						良好		
33	13	弥生土器	甕 底部か	C10	下		6			粗	良好	明赤褐色	底部のみ

【銭貨】

挿図	番号	種別	銭種	出土位置	位置分類	縦径(mm)	横径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	特徴
34	1	銭貨	宋永通寶	B10	下	2.5	2.45	1.3	3.30	文銭
34	2	銭貨	宋永通寶	B10	下	2.45	2.5	1.1	3.00	文銭
34	3	銭貨	宋永通寶	B10	下	2.5	2.45	1.2	2.92	文銭

第５章　自然科学分析 (AMS 年代測定)

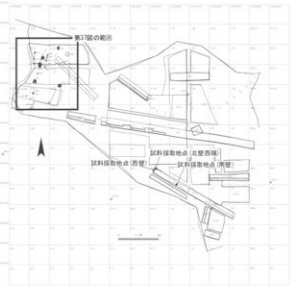
１．はじめに

祇園原Ⅲ遺跡は島根県東部出雲市斐川町直江・三絡に位置し，出雲平野を北に望む標高 50 ～ 60m の丘陵上に立地する。

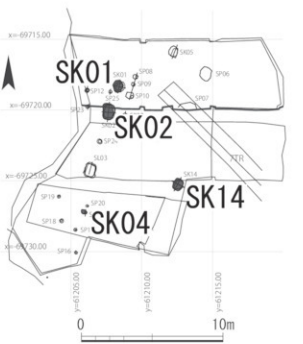
本報は，祇園原Ⅲ遺跡発掘調査に伴い検出された，地滑り跡について，その発生時期を明らかにするとともに関連する遺物包含層の形成時期を明らかにすること、また炭焼き跡の可能性がある焼成土坑の形成時期を明らかにすることを目的に、その結果を報告するものである。

２．試料について

第 36・37 図に示す各地点で年代測定試料を採取した。それぞれの地点での詳細を第 38・39 図に示すとともに，詳細を第３表に示す。



第 36 図　試料採取地点１



第 37 図　試料採取地点２

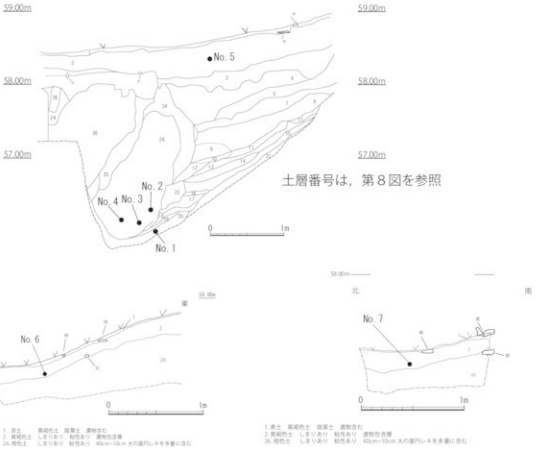
３．測定方法

第３表に示す前処理の後，二酸化炭素を生成，精製し，グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い，半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.2.4（Bronk Ramsey, 2009）を用い，INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

また，幾つかの試料では，Post-bomb atmospheric NH2 curve (Hua et al., 2013) を利用した。

４．測定結果

測定結果を第３表，第 40 図に示す。第３表には，δ^{13}C 値と３種類の年代を示している。第 40 図では一覧形式で，資料ごとに確率分布と σ ～２σ の校正範囲を示した。

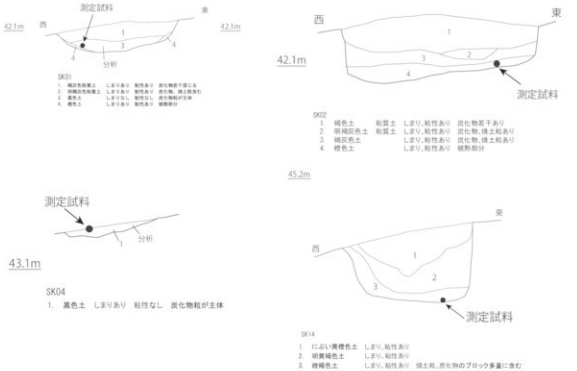


第 38 図　試料採取ポイント（２トレンチ）上：南壁　左下：北壁下端　右下：西壁

第３表　試料の詳細と年代測定結果

試料				前処理	測定年代** (yrBP±1σ)	δ13C (‰)	層年較正用年代 (yrBP±1σ)	補正年代** (yrBP±1σ)	層年較正年代		測定No.
試料No.	種別	出土地点	重量(g)						1σ 層年代範囲	2σ 層年代範囲	(PLD-)
2	植物片（土付）	２トレンチ 下層 No.2-No.4	10.602	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-591±17	-31.53±0.17	F14C 1.0908±0.0023	-700±15	Post-bomb NH2 2013: AD2000-2001(68.2%)	Post-bomb NH2 2013: AD1957-1958(4.8%) AD1999-2002(90.6%)	29876
3	植物片（土付）	２トレンチ 下層 No.3	2.3	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-462±17	-31.03±0.27	F14C 1.0724±0.0024	-560±15	Post-bomb NH2 2013: AD2003-2005(68.2%)	Post-bomb NH2 2013: AD1957-1957(10.0%) AD2002-2005(85.4%)	29877
5	炭化物（土付）	２トレンチ 上層 No.5	0.238	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	3551±21	-25.07±0.28	3549±21	3550±20	BC1935-1880(68.2%)	BC1953-1871(76.5%) BC1846-1812(11.5%) BC1803-1777(7.4%)	29878
6	古土壌	２トレンチ 北西壁 上層 No.6	218	湿式篩分：10Mμm以下 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-472±17	-26.20±0.28	-491±17 F14C 1.0631±0.0024	-490±15	Post-bomb NH2 2013: AD2005-2005(6.0%) AD2005-2007(53.0%) AD2007-2007(9.3%)	Post-bomb NH2 2013: AD1957-1957(5.2%) AD2005-2007(80.4%) AD2008-2008(7.4%) AD2009-(2.5%)	29879
SK01	炭化材	SK01	0.0726	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-26.13±0.18	970±21	950±20	950±20	AD1030-1049(18.1%) AD1085-1124(38.5%) AD1137-1150(11.6%)	AD1025-1059(25.8%) AD1065-1155(69.6%)	30780
SK02	炭化材	SK02	0.3844	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-26.31±0.17	1358±21	1336±20	1335±20	AD657-679(68.2%)	AD649-694(90.4%) AD748-763(5.0%)	30781
SK04	炭化材	SK04	0.7747	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-25.80±0.20	843±20	829±20	830±20	AD1192-1198(5.8%) AD1205-1250(62.4%)	AD1170-1257(95.4%)	30782
SK14	炭化材	SK14	0.1509	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N 水酸化ナトリウム 1.0N 塩酸 1.2N）	-25.64±0.18	1265±20	1254±20	1255±20	AD696-700(5.4%) AD710-746(53.5%) AD764-771(9.3%)	AD676-778(93.0%) AD792-802(1.2%) AD843-856(1.2%)	30783

**1 δ13C 補正無年代　**2 δ13C 補正年代



第 39 図 試料採取ポイント（焼成土坑）

左上：SK01　右上：SK02　左下：SK04　右下：SK14

5．年代測定値について

(1) 2トレンチ

① 下層

年代測定試料は，地滑り発生時に取り込まれたと考えられる。試料№ 2，3 ともに，現代を示す値が得られたことから，地滑りは比較的新しい時期に発生した可能性が示唆された。

② 上層（2層）

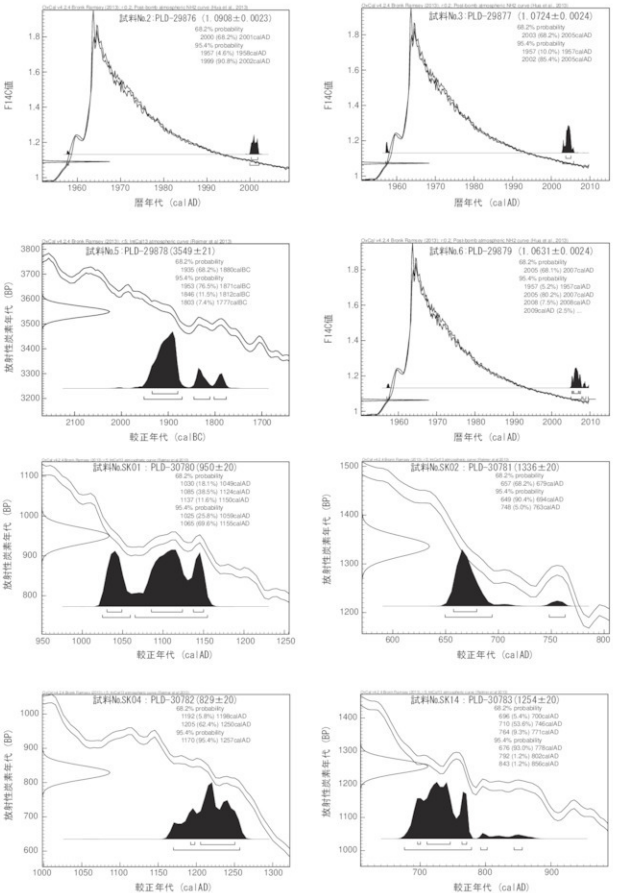
試料№ 5 は縄文時代後期，試料№ 6 は現代を示す値が得られた。現代の地滑り跡を覆う層でることから，縄文時代後期の堆積物であるとは考えられず，試料№ 5 は二次堆積したものと考えられる。同様に地滑り跡が現代のものであることを踏まえると，2層に含まれる遺物も，再堆積した可能性が高い。

(2) 焼成土坑

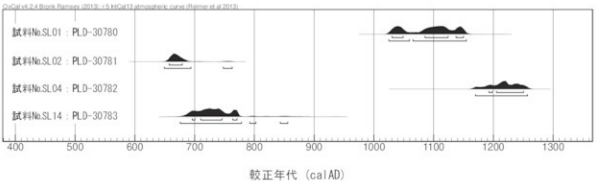
暦年較正値の分布（第 41 図）から，炭焼き跡と考えられる焼成土坑の形成時期は，大きく 2 時期に分かれたことが分かる。以下では 2 時期に分けて，それぞれの年代値について考察する。

① SK02，SK14

2 σで，SK02 から 7 世紀中頃～ 8 世紀中頃，SK14 から 7 世紀後半～ 9 世紀中頃の年代が得られた。前後する時期の遺構と捉えられるが，それぞれの年代幅が重なる 7 世紀後半～ 8 世紀中頃の遺構と考


試料No.2：PLD-29876（1.0908±0.0023）
68.2% probability
2000 (68.2%) 2001calAD
95.4% probability
1957 (4.6%) 1958calAD
1999 (90.8%) 2002calAD
試料No.3：PLD-29877（1.0724±0.0024）
68.2% probability
2003 (68.2%) 2005calAD
95.4% probability
1957 (10.0%) 1957calAD
2002 (85.4%) 2005calAD
試料No.5：PLD-29878（3549±21）
68.2% probability
1935 (68.2%) 1880calBC
95.4% probability
1953 (76.5%) 1871calBC
1846 (11.5%) 1812calBC
1803 (7.4%) 1777calBC
試料No.6：PLD-29879（1.0631±0.0024）
68.2% probability
2005 (68.1%) 2007calAD
95.4% probability
1957 (5.2%) 1957calAD
2005 (80.2%) 2007calAD
2008 (7.5%) 2008calAD
2009calAD (2.5%) ...
試料No.SK01：PLD-30780（950±20）
68.2% probability
1030 (18.1%) 1049calAD
1085 (38.5%) 1124calAD
1137 (11.6%) 1150calAD
95.4% probability
1025 (25.8%) 1059calAD
1065 (69.6%) 1155calAD
試料No.SK02：PLD-30781（1336±20）
68.2% probability
657 (68.2%) 679calAD
95.4% probability
649 (90.4%) 694calAD
748 (5.0%) 763calAD
試料No.SK04：PLD-30782（829±20）
68.2% probability
1192 (5.8%) 1198calAD
1255 (62.4%) 1250calAD
95.4% probability
1170 (95.4%) 1257calAD
試料No.SK14：PLD-30783（1254±20）
68.2% probability
696 (5.4%) 705calAD
710 (53.6%) 746calAD
764 (9.3%) 771calAD
95.4% probability
676 (93.0%) 778calAD
792 (1.2%) 802calAD
843 (1.2%) 856calAD
放射性炭素年代（BP）
較正年代（calBC）
較正年代（calAD）
暦年代（calAD）
F14C値

第 40 図　暦年較正図



第 41 図　暦年較正値の分布

えることもできる。

② SK01，SK04

２σで，SK01 から 11 世紀前半～ 12 世紀中頃，SK04 から 12 世紀後半～ 13 世紀中頃の年代が得られた。重なりが認められないことから，前後する時期の遺構と捉えられる。

6．まとめ

地滑りは，現代のものと推定された。炭焼き跡と考えられる焼成土坑は，大きく２時期に形成されたことが分かった。一方，祇園原Ⅲ遺跡内では，同様の遺構がまだ多く検出されている。このことから，遺跡内で同様の遺構が連綿と形成されてきたものか，断続的に２時期（あるはそれ以上）に形成されたものかの判断が付かなかった。今後，残りの遺構についても年代測定が実施されることによって，遺構の全容が明らかになろう。

引用文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A.J. (2013) Atmospheric radiocarbon for the period 1950–2010. Radiocarbon, 55, 2059e2072

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

（文化財調査コンサルタント株式会社　渡辺正巳）

第 42 図　　発掘調査の様子②

第６章　総　括

第１節　地滑りの痕跡について

調査区の西側斜面では，地滑りの痕跡（円弧滑り）と考えられる不自然な地形が確認された。

当初，遺構が存在する可能性を考えてトレンチを設定したが，地滑りにより大きく改変されていたため，斜面下の裾部から遺構を検出するにとどまった。

また，地滑りの年代について，２トレンチのサブトレンチ溝状部分で崩落土のAMS年代測定を行った結果では，ごく近年の地滑りとの結果が示されており，遺物包含層についても，安定した遺物包含層ではなく，２次堆積の可能性が高いとの結果が示された（第５章）。地滑りの調査例としては，松江市宍道町伊志見のラント遺跡においても２次堆積がみられる(1)。

第２節　焼成土坑について

焼成土坑について群馬県の炭焼き土坑を集成した大塚昌彦氏によれば，炭焼き土坑の平均的な大きさとして，長軸が150㎝弱，短軸が100㎝，深さ50～70㎝である。形態は，平面形が楕円形，隅丸長方形が多く，断面は，床が平坦で壁がほぼ垂直に立ち上がる。また，この遺構には製鉄関連の遺構が周辺に所在する可能性を示している(2)。大塚氏の論考を受け，埼玉県本庄市の女池遺跡Ⅲにおいて検出した遺構を炭焼きの遺構としている(3)。その特徴として平面・断面形状，規模，壁面の被熱，底面に多量の炭化材が残存しているなどの点から炭焼きの遺構であると判断しており，本遺跡で確認した土坑と類似する点が多く，検出した焼成土坑は炭焼き跡と考えられる。

炭焼き跡に残留していた炭化物のＡＭＳ年代測定の結果，SK02とSK14は７世紀後半から８世紀中頃の遺構と考えることができる（第５章）。また，SK03についても，形状から同時期の遺構と考えたい。その他の事例として本遺跡から北西1.5㎞の三井Ⅱ遺跡から奈良時代頃とされる横口式炭焼窯が２基が確認されており，その周辺からは製鉄炉の炉壁が溝中より出土しているなど製鉄遺跡が存在する可能性がある。また，杉沢遺跡では，３基の炭焼土坑を検出している(4)。現在のところ斐川地域で製鉄遺構は確認されていないが，今後，炭焼き跡の周辺に製鉄関連の遺構が発見される可能性があることに注意すべきである。

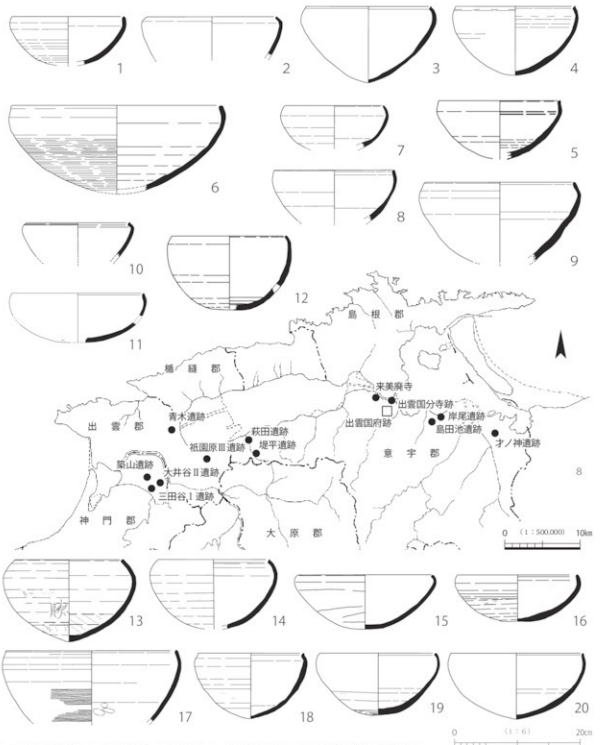
第３節　鉄鉢形土器について

出雲地方出土の鉄鉢形須恵器は，12遺跡52点が知られている。その内，出雲市内では祇園原Ⅲ遺跡を含めて５遺跡14点が見つかっており，上塩冶地内に集中する傾向がうかがえる。（第43図・第４表）。

形態的には，底の尖る形態と丸底になるものに大きく分かれる。祇園原Ⅲ遺跡から出土した須恵器

は丸底の鉄鉢形土器である。

また，鉄鉢形土器は，灯明皿形の須恵器と共伴する事例が多い。灯明皿形の土器は，仏教儀礼に用いられたと考えられており(5)，当遺跡で灯明皿形土器は出土していないものの，鉄鉢形土器を仏教的要素を帯びた遺物として考えたい。



1・2：出雲国分寺跡，3・4：堤平遺跡，5：岸尾遺跡，6・7：出雲国府跡，8・9：島田池遺跡，10：来美廃寺
11：才ノ神遺跡，12：荻田遺跡，13・14：築山遺跡，15：青木遺跡，16：祇園原Ⅲ遺跡，17：大井谷Ⅱ遺跡，18～20：三田谷Ⅰ遺跡

第 43 図　出雲地方出土の鉄鉢形土器

第４表　鉄鉢形土器出土地一覧表

遺跡名	所在地	点数	遺跡の性格	参考	時期	参考文献
史跡出雲国府跡	松江市大草町	11点	官衙遺跡	灯明皿40点	8C か	島根県教委2013『史跡出雲国府跡Ⅰ−９　総括編−』
史跡出雲国分寺跡	松江市竹矢町	4点	寺院跡	灯明皿あり	8C か	松江市教委2015『史跡出雲国分寺跡発掘調査報告書−総括編−』
来美廃寺	松江市矢田町	6点	寺院跡	灯明皿34点	8C後半	島根県教委2002『来美廃寺』
島田池遺跡　8区	松江市東出雲町	5点	国庁関連の建物か？	灯明皿あり	8C後半	島根県教委1997『島田池遺跡・鶴貴遺跡』
岸尾遺跡	松江市東出雲町	1点	集落跡		8C	島根県教委1997『岸尾遺跡・島田遺跡』
オノ神遺跡	安来市黒井田町	1点	仏教関連施設？	灯明皿あり	8C中葉〜9C前半	島根県教委1995『オノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡』
堤平遺跡	松江市宍道町	10点	仏教関連施設	灯明皿あり	8C	島根県教委　2002『堤平遺跡』
萩田遺跡	松江市宍道町	1点	集落跡		9C前半	西尾克己他1998『出土品から見た萩田遺跡の性格』『宍道町歴史叢書Ⅲ3　宍道町教委
三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塩冶町	6点	神門郡衙関連の倉庫群	灯明皿あり	8C後半〜9C初	島根県教委　2000『三田谷Ⅰ遺跡』vol2
築山遺跡	出雲市上塩冶町	5点	仏教関連施設？	灯明皿あり	8C後半〜9C前半	出雲市教委2009『築山遺跡』
大井谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町	1点	仏教関連施設？	灯明皿あり	8C か	出雲市教委2001「大井谷Ⅰ・大井谷Ⅱ遺跡」
青木遺跡BV区	出雲市東林木町	1点	仏教関連施設？		8C後半	島根県教委2006『青木遺跡Ⅱ』
祖園原Ⅲ遺跡	出雲市愛川町	1点	仏教関連施設？		8C	本書

第４節　小結

尾根での出土遺物は極めて少なく，表土から須恵器破片が出土しているのみであり，遺構などは確認できなかった。

遺物の出土傾向としては，地滑りにより土が動いており，原位置とは異なる可能性があるが，西側斜面上段から裾にかけて出土している。須恵器の時期は，出雲Ⅲ期〜Ⅴ B 期と８世紀を中心としており，７世紀（出雲４期）から９世紀を含む遺物が出土している。石鏃は，斜面上段の出土が多く，黒曜石の剥片もあることから，尾根上での加工された可能性がある。土師器は，斜面下の裾部で出土しているが，実測できる遺物は４点と少ない。小型の壺は，内・外面とも赤色塗彩されており，古墳時代後期に祭祀に関わる使用が想定される遺物である。須恵器のうち，鉄鉢形土器は上・中・下段と西側斜面全体から出土し，破片の接合関係を確認することができた。地滑りで下方へ流出したと考えると，上段平坦面で利用した可能性が残る。

遺構は，西斜面の山裾部分で確認できる。被熱を受けた土坑のうち，隅丸長方形で，床が平坦で壁がほぼ垂直に立ち上がる特徴などから，７世紀後半から８世紀中頃の炭焼き跡と考えられ，周辺に製鉄関連遺構が存在する可能性がある。

また，赤色塗彩の土師器小型壺や鉄鉢形土器など一般の集落跡と性格が異なる遺物が出土したことは，仏教関連施設など想定できるかもしれないが，遺構は確認していない。遺跡周辺では，近年開発が進んでおり，今後の調査成果によって周辺の歴史が明確になることを期待したい。

註

（1）　島根県教育委員会　2001『荒畑遺跡・ラント遺跡・野田遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 11

（2）　大塚昌彦　2000「伏焼法による炭焼き土坑－薬師・半田中原遺跡の製鉄関連炭焼き土坑－」『群馬考古学手帳』10　群馬土器観会

（3）　本庄市教育委員会　2009『女池遺跡Ⅲ－C地点の調査－』

（4）　出雲市教育委員会　2016『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲市の文化財報告 31

（5）　林健亮　2000「灯明皿型土器から見た仏教関連遺跡」『出雲古代史研究』第 10 号　出雲古代史研究会

写真図版

航空写真（上：南西から　下：南東から　矢印が祇園原Ⅲ遺跡発掘調査の位置）

図版 2

発掘調査前（西から）

発掘調査前（東から）

全景（発掘調査後・西から）

図版 4

尾根から西側斜面（南から）

尾根平坦部分（北から，背後に山陰自動車道）

尾根平坦部分（南から，遠方に宍道湖を望む）

斜面部分（北から，背後に仏経山）

図版 6

尾根平坦部分（南から，遠方に出雲平野を望む）

1トレンチ南壁の土層（北から）

2トレンチ南壁の土層（北東から）

図版８

山裾部分の遺構（西から）

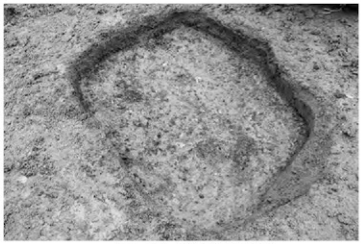
ＳＬ０１　半截確認状況（東から）

ＳＬ０１　完掘状況（西から）

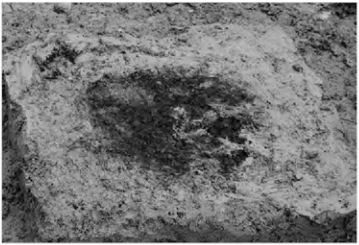
ＳＬ０２　半截状況（南西から）

ＳＬ０２　完掘状況（南東から）

ＳＬ０３　半截状況（南西から）



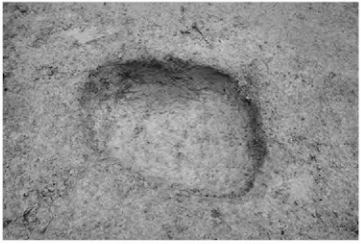
ＳＬ０３　完掘状況（北から）



ＳＬ０４　検出状況（西から）

ＳＬ０４　半截状況（西から）

ＳＬ０５　半截状況（西から）



ＳＬ０５　完掘状況（西から）

ＳＬ１４　半截状況（北から）

ＳＬ１４　完掘状況（西から）

26-1

26-7

26-6

26-8

26-11

26-5

26-13

26-3

26-12

上段出土土器

27-1

27-3

27-7

27-5

27-8

27-4

27-11

27-14

27-13

27-15

27-17

27-16

27-18

中段出土土器

33-3

33-4

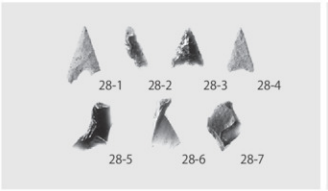
33-5

33-7

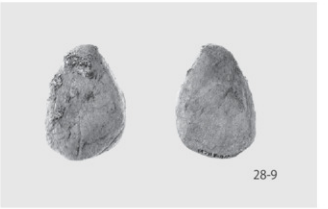
33-8

33-9

下段出土土器


28-1 28-2 28-3 28-4 28-5 28-6 28-7

28-8


28-9

上・中段出土石器

報告書抄録

ふりがな	ぎおんばらさんいせき
書　名	祇園原Ⅲ遺跡
副書名	県道斐川上島線（武部２工区）改良事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	３４
編著者名	石原　聡（編）・渡辺正巳
編集機関	出雲市市民文化部文化財課
所在地	〒699-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL（0853）21-6893
発行年月日	平成２９年（2017）３月２８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ぎおんばらさんいせき 祇園原Ⅲ遺跡	しまねけんいずもしひかわちょう 島根県出雲市斐川町 なおえ　みつがね 直江～三絡	32203	Y242	36° 36′ 96″	132° 84′ 05″	20150702 ～ 20160131	1,350 ㎡	道路建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祇園原Ⅲ遺跡	散布地	奈良・平安	炭焼き跡６	須恵器，土師器，石鏃，銭貨	鉄鉢形須恵器が出土した。

要　約

県道斐川上島線の改良工事にともない出雲市斐川町の祇園原Ⅲ遺跡を発掘調査した。

地滑りの跡と考えられる不自然な地形が残っており，年代測定の結果では現代におきた地すべりにより大きく改変されていることが判明した。地滑りの発生していない斜面下の山裾部分で一部遺構を確認した。

遺構のうち６基は焼成土坑であり，炭焼き跡と考えられる。６基のうち３基は７世紀後半から８世紀前半の炭焼き跡である。

遺物は，須恵器・土師器・石鏃・銭貨（寛永通宝）が出土した。縄文・弥生時代の石鏃，内外面が赤色塗彩されている土師器小型壺，鉄鉢形の須恵器が出土している。

一般集落跡と異なる性格の遺物が出土したことは，仏教関連の施設など想定できるかもしれないが，明確な遺構を確認することはできなかった。

出雲市の文化財報告 34

祇園原Ⅲ遺跡

県道斐川上島線（武部２工区）改良事業予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 29 年（2017）年３月

編　集　：出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760
ＴＥＬ（0853）21-6893

発　行　：出雲市教育委員会

印刷・製本：有限会社　西村印刷